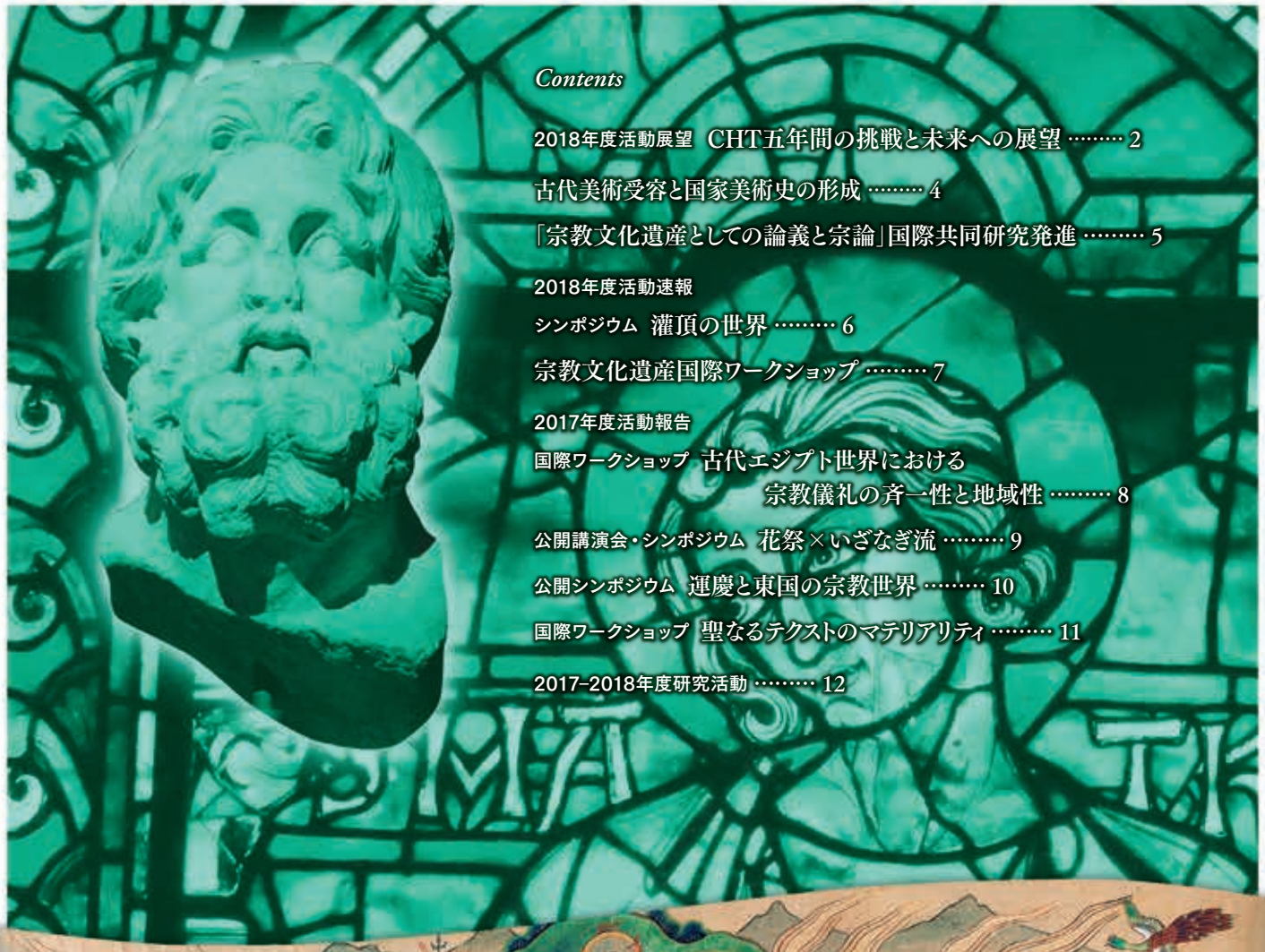
Research Center for Cultural Heritage and Texts

CHT Newsletter

2018 No. 4 August

名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センター



Contents

2018年度活動展望　CHT五年間の挑戦と未来への展望 …… 2

古代美術受容と国家美術史の形成 …… 4

「宗教文化遺産としての論義と宗論」国際共同研究発進 …… 5

2018年度活動速報

シンポジウム　灌頂の世界 …… 6

宗教文化遺産国際ワークショップ …… 7

2017年度活動報告

国際ワークショップ　古代エジプト世界における宗教儀礼の斉一性と地域性 …… 8

公開講演会・シンポジウム　花祭×いざなぎ流 …… 9

公開シンポジウム　運慶と東国の宗教世界 …… 10

国際ワークショップ　聖なるテクストのマテリアリティ …… 11

2017-2018年度研究活動 …… 12

CHT 五年間の挑戦と未来への展望

Five Years of CHT: Challenges and Perspectives for the Future

阿部泰郎
名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センター長・教授

2013年度に発足した人類文化遺産テクスト学研究センターは、現在まで五年間、積極的な研究活動を展開して参りました。この間、アーカイヴス部門はセンター長の阿部を研究代表として、科研基盤(S)「宗教テクスト遺産の探査と綜合的研究」(2014–18) により、中部地域を軸として全国に渉る広汎な宗教テクストの諸領域の調査研究とそのアーカイヴス化を推進してきました。この間、学内の競争的研究助成として最先端国際研究ユニット「文化遺産創成と記憶の力のテクスト学」(2015–17) を得て、より国際的かつ先端的な人文学の共同調査研究への挑戦を試み、また JSPS の先導的人文学開拓グローバル展開プログラム（課題設定型）に採択された「絵ものがたりメディア文化遺産の普遍的価値の国際共同研究による探求と発信」(2016–19) により、本科研による絵巻や絵伝などの宗教テクスト図像のアーカイヴス化とその活用についても大きな進展をみることとなりました。

物質文化部門は周藤芳幸教授を研究代表者とする科研基盤(A)「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」(2018–22) が続けて採択され、活発な国際的調査・研究活動を展開しています。また周藤教授は、本年６月に名古屋大学高等研究院長に就任されました。今後の高等研究院との有機的な連携が期待されるところです。視覚文化部門では、木俣元一教授（副総長）による共同研究プロジェクト「聖なるもののイメージとマテリアリティ」を展開し、CHT での多数のセミナーに加え、独ハイデルベルク大学・仏ストラスブール大学との国際ワークショップも回を重ねております。

研究員諸氏の活躍も目覚ましく、松山由布子研究員は JSPS 特別研究員に採用され、猪瀬千尋、三好俊徳両研究員は科研基盤(C)を獲得したほか、野澤暁子研究員は多くの公私の研究助成を得て国際学会で活躍しております。竹田伸一研究員は、鹿島美術財団からの研究助成を得ています。

更に、三部門は協同して JSPS 研究拠点形成事業 Core-to-Core プログラム（先端型Ａ）に「テクスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築」(2017–21) を課題として提案し、幸いにも採択され、米コロンビア大学、仏コレージュ・ド・フランス、独ベルリン自由大学との国際共同研究を軸とした、日本および世界の宗教文化遺産を対象に諸分野融合による先端的なテクスト学による普遍的意義への認識を飛躍的に進展させるためのプロジェクトを発進させました。18年度には、米ハーバード大学・美術館との共同研究・教育セミナーも６月にスタートし、カルフォルニア大学サンタバーバラ校での「灌頂」学会も５月に行われました。特筆すべきは、コレージュ・ド・フランスとの宗教的論争「論義」をめぐる共同研究で、17年度秋にパリにおいて、ジャン=ノエル・ロベール教授と共同して学会を開催、更に CHT と18年春に連携協定を締結した龍谷大学世界仏教センターとの共催で、京都で「日本仏教と論義」学会を５月に開催いたしました。また、南山大学宗教文化研究所との共同で「日本宗教文化セミナー」を１月に催し、これは更に継続されます。このような多面的かつ広汎な研究交流が展開することは、CHT を支えてくださる多くの方々の支援の賜物に他なりません。厚く感謝申し上げるところです。

当 CHT の設立５年目を迎え、また科研基盤(S)の成果を学会と社会に提示するため、国文学研究資料館をはじめとする人間文化研究機構と神奈川県立歴史博物館、同県立金沢文庫、國學院大學神道博物館との連携展示「列島の祈り」が今秋に開催されます。CHT はその各館での展示や学術成果の社会還元を全力を挙げて支援いたします。それらの活動が、また更なる CHT の一層の大きな飛躍につながる着実な一歩となるように、最後まで奮闘する覚悟です。次期の CHT が人類文化の遺産をめぐってどのような壮大なテクスト学の夢を見ることができるか、大いなる期待に胸を躍らせ待ち望んでいます。

表紙写真：テゲア（アルカディア）出土のサラピス神像、シャルトル大聖堂北正面のステンドグラス「聖マタイ」、平野大念仏寺所蔵『融通大念仏亀鐘縁起』

フランス／アメリカ／ドイツ

国際研究拠点形成事業
Core-to-Coreプログラム
（JSPS受託事業）

テクスト学による宗教文化遺産の
普遍的価値創成学術共同体の構築
（2017～2021）

フランス／アメリカ／ドイツ

グローバル展開プログラム
（JSPS受託事業）

絵ものがたりメディア文化遺産の
普遍的価値の国際共同研究による
探求と発信
（2016～2019）

名古屋大学人文学研究科附属

人類文化遺産テクスト学研究センター

CHT

Research Center for Cultural Heritage and Texts

〈宗教文化遺産テクスト学研究拠点〉

歴史・考古学
物質文化
部門

アーカイヴス
部門

美術史・イメージ
視覚文化
部門

科学研究費補助金 基盤研究（A）

古代地中海世界における
知の動態と文化的記憶
（2018～2022）

研究代表：周藤芳幸

科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業
支援共同研究

古代美術受容と国家美術史の形成
（2017～2018）

研究代表：松井裕美

科学研究費補助金 基盤研究（S）

宗教テクスト遺産の探査と綜合的研究
人文学アーカイヴス・ネットワークの構築
（2014～2019）

研究代表：阿部泰郎

科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業支援共同研究

古代美術受容と国家美術史（ナショナル・アート・ヒストリー）の形成

The Reception of Antique Art and the Formation of a National Art History

シンポジウム「西洋美術史における〈古典〉と〈古典主義〉」

Classics and Classicism in Western Art History

2018年7月14日㊏・15日㊐　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

2018年7月14日・15日に、CHT主催シンポジウム「西洋美術史における〈古典〉と〈古典主義〉」が名古屋大学で開催された。本シンポジウムは、前年度に発足した共同研究「古代美術受容と国家美術史（ナショナル・アート・ヒストリー）の形成」の成果の総括を目的とするものであった。共同研究の代表者およびこの会の企画者として、研究活動に触れたのち、その成果である本シンポジウムについて簡単に紹介したい。

科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業の支援を受けて実現した本共同研究は、時代および地域ごとに異なる古典主義の諸様相と歴史的な叙述との関係性を問うことを目的とし、谷古宇尚教授（北海道大学）、芳賀京子准教授（現東京大学、発足当初は東北大学教授）、木俣元一教授（名古屋大学）、栗田秀法教授（名古屋大学）、百合草真理子特任助教（名古屋大学）を構成員として発足した。初年度は小佐野重利特任教授（東京大学）と三浦篤教授（東京大学）にもご発表いただき、計3回の研究集会を開催した。また本研究会に関連し、2017年9月23日・24日には、デヴィッド・コッティントン教授（キングストン大学）や河本真理教授（日本女子大学）、久保昭博教授（関西学院大学）を基調講演者に迎え、国際シンポジウム「前衛芸術と古典主義、1880年～1945年」を開催した。

共同研究のメンバーに加え、小佐野重利特任教授、秋山聰教授（東京大学）、奈良澤由美教授（城西大学）、佐藤直樹先生（東京芸術大学）、伊藤拓真准教授（神戸女学院大学）、川本悠紀子特任助教（名古屋大学）にご発表いただいたこの度の総括シンポジウムでは、古代から現代までの西洋美術史における「古典主義」が持つ多角的な問題系とその射程の広さを確認する貴重な機会となった。イメージの借用の問題、事物の再利用の問題（スポリア）、様式論、規範の形成過程、展示やコレクション収集、芸術家列伝や美術教育など、議論は多岐にわたった。

こうした議論をとおして浮かび上がったのは、現在が過去に向ける特殊なまなざしがあってはじめて成立するような古典主義の問題系である。このまなざしは、一方では過去から継承された特定の遺産のうちに変わらない普遍的な価値を見ようとするのだが、他方ではそうした芸術作品を展示したり、新しい芸術の創出に役立てたりすることによって、絶えず過去を新しい文脈の中に置き直す作用をもたらすものでもある。つまり古典主義とは、特定の時代や地域において文化遺産にたいして行われる価値付与の営みと、それを支える歴史観や体制の展開の双方に関わる問題なのである。したがって「古典主義」再考の試みは、過去の芸術の歴史認識と現在における文化や価値体系の展開とのあいだの、動的で双方向的な影響関係を検討することに結びつき得る。またそれは、時代や地域によって異なる過去の文化への回帰の多様な様態をもたらす社会的・思想的諸要因を探ることでもあるのだ。

末尾ながら、度重なる共同研究会に発表者や司会者としてご参加くださった諸先生方に、深くお礼を申し上げます。また、本研究会を開催するにあたってご支援を賜りました諸関係機関のみなさまに、深謝申し上げます。

（松井裕美　人文学研究科特任助教）

Core-to-Core Program ● テクスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成国際学術共同体の構築

「宗教文化遺産としての論義と宗論」国際共同研究発進

Buddhist Disputations: A product of Cultural and Religious Heritage / Start of a New International Collaborative Research

「法寶義林」学会2017「論義と宗論の文化史」2017年10月10日㈫―12日㈭　コレージュ・ド・フランス

A Cultural History of Buddhist Disputations (Rongi) and Intersectarian Debates (Shūron)

龍谷大学世界仏教研究センターとの研究協定締結　2018年1月25日㈭　龍谷大学大宮キャンパス

Research Partnership Established with the Barc Research Center for Buddhist Cultures in Asia, Ryūkoku University

国際シンポジウム「日本仏教と論義」2018年5月12日㈯・13日㈰　龍谷大学大宮キャンパス

Disputations and Japanese Buddhism

論義とは問答を行って経論の内容を明らかにすることである。インドに遡って行われているが、日本でも古代より法会のなかで実施されていた。平安時代以降はより形式化され宮中や寺院において盛んに行われていた。供養や追善目的以外にも、竪義と呼ばれる僧階試験のものがあり、特に維摩会をはじめとする南都三会の論義に講師として出仕することは、日本の僧官制度である僧綱への任官とも関連するために重視された。『春日権現験記絵』が代表例であるが、論義の様子が絵や文で描写されたり、さらには議論の内容が記録され寺院に保管されたりもしている。このような日本仏教もしくは日本社会に大きな影響を与えた論義の実態や意義を多面的に検討すべく、仏教学・民俗学・文学・思想史の研究者が一堂に会し、二度にわたってシンポジウムが開催された。

2017年10月には Jean-Noël ROBERT（コレージュ・ド・フランス）が主催する「法寶義林」プロジェクトの一環として、CHT も全面的に協力し、パリのコレージュ・ド・フランスにおいて国際シンポジウムが開催された。初日10日には阿部泰郎（名古屋大学 CHT）の講演「論義と宗論の文化史」を皮切りに、Didier DAVIN（国文学研究資料館准教授）、Gaétan RAPPO（名古屋大学）、石井公成（駒澤大学）、松尾恒一（国立歴史民俗博物館）、Jérôme DUCOR (Musée d'Ethnographie de Genève)、Claire-Akiko BRISSET (Université Paris Diderot) らによる発表が行われた。翌日11日には、野呂靖（龍谷大学）、田戸大智（国際仏教学大学院非常勤講師）、松本知己（法政大学非常勤講師）、渡辺麻里子（弘前大学）という主に仏教学および聖教調査を踏まえた研究発表が、12日には、三好俊徳（名古屋大学 CHT 研究員）、近本謙介（名古屋大学）、山口眞琴（兵庫教育大学）による文学・思想史の立場からの研究発表が行われ、最後に参加者の Paul GRONER（バージニア大学）、Lucia DOLCE（ロンドン大学）らを交えて 3 日間の講演・発表の全体に関する総合ディスカッションが行われた。

センター学術交流で包括協定

文献研究の成果など共有　共同シンポも

龍谷大・名古屋大

「文化時報」2018年1月31日

このシンポジウムにおける議論の深まりを踏まえ、続編を日本で開催することが CHT より提案され承認された。そして、龍谷大学で開催されたのが、国際シンポジウム「日本仏教と論義」である。ところで、それに遡る2018年1月に、龍谷大学世界仏教文化研究センターと名大 CHT との間で研究協定が締結された。このシンポジウムは、仏教の総合的学術研究の推進や仏教研究の国際的拠点の形成を目的とした両センターによる共同研究の第一弾という位置づけでもあったのである。

2018年5月12日には、西山良慶（龍谷大学博士後期課程）、高田悠（龍谷大学非常勤講師）、別所弘淳（大正大学非常勤講師）、ザイレ暁映（法相宗大本山興福寺教学部）の 4 名の若手研究者による論義についての研究発表が行われた。翌日13日には Jean-Noël ROBERT による基調講演の後に、楠淳證（龍谷大学）、蓑輪顕量（東京大学）、苫米地誠一（元大正大学）の講演とパネル・ディスカッションが行われた。論義の意義を世界的視野から位置づけるロベール教授による基調講演の後に、各講演により法相宗・戒律・真言宗における論義の内容と歴史が示され、日本論義の全体像が示されたシンポジウムであった。（三好俊徳　CHT 研究員）

2018年度活動速報 ● シンポジウム　Core-to-Core Program

灌頂の世界――仏教文化圏における通過儀礼の思想と実践

The World of Abhiseka: Consecration Rituals in the Buddhist Cultural Sphere

2018年5月7日㈪・8日㈫　カリフォルニア大学サンタバーバラ校

2018年５月７日と８日の二日間、カリフォルニア州立大学サンタバーバラ校（以下 UCSB）で灌頂をテーマとしたシンポジウム“The World of Abhiseka: Consecration Rituals in the Buddhist Cultural Sphere”（灌頂の世界―仏教文化圏における通過儀礼の思想と実践）が開催された。灌頂とは一般的に仏教、とくに真言密教における戒律や法位の相伝儀礼を指し、インド仏教を起源とする。一方、日本では神祇灌頂や和歌灌頂など、灌頂は神道や技芸に到るまで広汎な文化的展開を見せた。

すでに、本シンポジウムの参加者の一人で、CHT との連携パートナーでもある森雅秀・金沢大学人間社会研究域教授によって東アジア仏教全体を概括する灌頂学会が2012年に開催されている（その成果は、法藏館より『アジアの灌頂儀礼―その成立と伝播』として2014年に出版された）が、本シンポジウムはそこからさらに視野を広げ、上記の神祇灌頂や和歌灌頂などの種々の灌頂についても包括してとらえようという意欲的な試みであった。

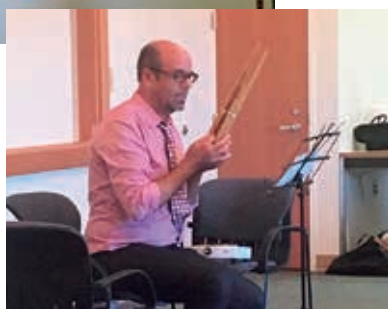
初日はまず阿部泰郎氏（本学 CHT センター長）による講演「日本における灌頂の文化史」が行われ、シンポジウムの内容についての日本研究の見取り図が示された。以下、シンポジウムはインドから日本へとゆるやかな順序をたどりつつ次の五つのパネルにより行われた。

まず①インド古代仏教のパネルでは D.G. ホワイト氏（UCSB）、森雅秀氏により、古代インド史および原初仏教における灌頂についての報告がなされた。ついで②仏教の世界のパネルでは A.C. クルーグ氏（コロラドカレッジ）、D. ステアーヴ氏（UCSB）、阿部龍一氏（ハーバード大学）よりインド仏教、道教、日本仏教をテーマとする報告がなされた。③日本で固有化された灌頂Ｉのパネルでは伊藤聡氏（茨城大学）、冨島義幸（京都大学）、P. グローナー氏（バージニア大学）より神道灌頂、結縁灌頂、戒灌頂をテーマとした報告がなされた。

二日目の④日本で固有化された灌頂IIのパネルでは川崎剛志氏（就実大学）、A. カスティリオーニ氏（UCSB）により修験道をテーマにした発表が、O. ポラト氏（同）、R. ドルチェ氏（ロンドン大学）よりそれぞれ稚児灌頂、瑜祇灌頂をテーマとする報告がなされた。⑤芸術伝統の中の灌頂では海野圭介氏（国文学研究資料館）、S.B. クレイン氏（カリフォルニア大学アーバイン校）、猪瀬千尋（名古屋大学）、F. ランベッリ氏（UCSB）より和歌灌頂、即位灌頂、琵琶灌頂、笙灌頂をテーマとする報告がなされた。最後にスペシャルイベントとして F. ランベッリ氏によって、笙灌頂の時に吹かれる秘曲「荒序」の演奏が成された。

シンポジウムでは国文学、民俗学、宗教学、美術史学、建築学などの多様な研究領域を横断する形で活発な議論がなされ、大きな意義があったことを実感した。最後になるが会場を提供していただくとともに、心からの厚いもてなしをしていただいた F. ランベッリ氏、O. ポラト氏、そして UCSB のみなさんに深く感謝申しあげる。

（猪瀬千尋　CHT 特任研究員）



宗教文化遺産国際ワークショップ

International Workshops on Religious and Cultural Heritage

「日本宗教研究の最前線」

The Frontline of Studies on Japanese Religions

2018年6月21日㈭・22日㈮　名古屋大学文学部棟 大会議室

2018年6月21日・22日、「日本宗教研究の最前線」国際ワークショップ（名古屋大学人類文化遺産テクスト学研究センター主催、ハーバード大学東アジア言語文化学部共催）が、名古屋大学において開催された。

初日の21日は、はじめに阿部泰郎氏（名古屋大学）と阿部龍一氏（ハーバード大学）が開会の辞を述べた。その後、近本謙介氏（名古屋大学）が研究集会の趣旨を説明し、3名の発表が行われた。郭佳寧（名古屋大学）「大伝法院創建から見る覚鑁と鳥羽院」は、金剛峯寺と大伝法院との相論について論じた。Jonathan Thumas氏（ハーバード大学）「アーカイヴとしての経塚―歴史考古学からみた院政期の別所」は、平安後期の経塚を例として、アーカイヴとしての経塚の再解釈を行った。Jesse LeFebvre氏（ハーバード大学）「非歴史的物語としてのリアルポリティーク―伴大納言絵詞に関する一考察」は、「応天門の変」を中心として、説話化された絵巻の制作意図を分析した。

22日には、4名の研究発表、及び調査報告を行った。金陀美氏（名古屋大学）「明恵の釈迦信仰―『十無尽院舎利講式』を中心に」は、伝記・縁起資料とあわせて明恵の釈迦信仰について論じた。Eric Swanson氏（ハーバード大学）「「聖なる天蓋」の修繕と雅楽の力―『七天狗絵』東寺巻の再考察を中心に」は、醍醐寺桜会の場面に関する分析を通して、『七天狗絵』の制作をめぐる再解釈を試みた。Julia Cross氏（ハーバード大学）「湯殿山の即身仏―イデオロギー、共同体、政治」は、湯殿山における即身仏（ミイラ）をめぐる信仰の実態を考察した。最後に、三好俊徳氏（名古屋大学）「真福寺聖教の書写・伝来と大須文庫の形成」は、大須文庫の歴史的変遷、また近年における聖教調査の進展状況を報告した。

この度のワークショップには、Paul Swanson氏（南山大学）、吉田一彦氏（名古屋市立大学）、土屋有里子氏（名古屋市立大学）、舩田淳一氏（金城学院大学）、梶原義実氏（名古屋大学）、Gaetan Rappo氏（名古屋大学）がコメンテーターとして加わり、たいへん有意義な研究集会となった。

「像内納入品研究の地平」

The New Horizons of Research on Objects Inserted in Statues

2018年6月23日㈯・24日㈰　神奈川県立金沢文庫

2018年6月23日・24日、神奈川県立金沢文庫において国際ワークショップ「像内納入品研究の地平」（名古屋大学人類文化遺産テクスト学研究センター、ハーバード大学東アジア言語文化学部、“From The Ground Up: Buddhism & East Asian Religions” University Of British Columbia and the Social Sciences And Humanities Research Council In Canada、École française d’Extrême-Orient、神奈川県立金沢文庫共催）が開催された。

初日の23日は、午前中に金沢文庫の資料室において寄託の称名寺本尊弥勒菩薩像等の像内納入品について、瀬谷貴之氏（金沢文庫主任学芸員）を講師として特別観覧を行った。その間、阿部泰郎氏（名古屋大学）による像内納入品に関する特別レクチャーが行われた。午後には、奥健夫氏（文化庁主任文化財調査官）と長岡龍作氏（東北大学）が研究報告を行った。奥氏は文化財の保護と修復の立場から、近年における日本の像内納入品に関する調査活動の実態を紹介した。長岡氏は「清涼寺釈迦如来像の胎内に見る信仰世界」として、長年調査に携わった清涼寺釈迦像の像内納入品をめぐって新たな解釈を提示した。報告の後、秋山聰氏（東京大学）が、東アジアと西洋における文化の差異の視点からコメントし、仏像・神像・聖人像にわたる新たな研究の可能性が提示された。

24日には、海外の研究者3名による研究報告があった。James Robson氏（ハーバード大学）「Filled With Meaning: Statues and Their Contents in East Asia」は、日本・中国・韓国における像内納入品の調査状況を紹介し、新たな国際的ネットワークの構築を提起した。その後、Youn-mi Kim氏（梨花女子大学）「Body inside Body: Donor Clothing Enshrined in Korean Buddhist Statues」は、韓国における像内納入品の特徴を紹介した上、納入品と寺院の創建縁起との関係性について考察した。Suenghye Lee氏（サムスン美術館リウム）「Pokchang: The Consecration Deposits of Korean Buddhist Images」は、現存する韓国の仏像像内納入品（「腹蔵品」）の事例、及び保存・調査の状況を紹介した。

2日間にわたって行われた国際ワークショップでは、東アジアの研究者によって内容豊かな研究報告が行われ、有益な意見交換も遂げられた。今回のワークショップを契機として、より広範かつ継続的な研究ネットワークの構築が期待される。　（郭佳寧　文学研究科博士後期課程）

2017年度活動報告 ● 国際ワークショップ　Core-to-Core Program

古代エジプト世界における宗教儀礼の斉一性と地域性

Uniformity and Regional Diversity in Ancient Egyptian Religious Practice

2017年10月27日㊎　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

古代エジプト文明が誇る膨大な宗教文化遺産は、悠久のナイルのほとりで繰り広げられていた宗教儀礼が、いかに豊饒な世界観を内包していたかを雄弁に物語っている。それでは、ファラオを頂点とするこの広大な専制領域国家において、その宗教儀礼はどれほど斉一化されていたのであろうか。確かに、古代エジプトのモニュメントは、紀元前３千年紀の古王国時代からプトレマイオス朝時代、さらにはローマ時代にいたるまで、一見したところでは、相互にきわめて似通っている。共時的にも、一千キロを超えるナイルの上流から下流に至るまで、各時代の宗教儀礼に関わる神殿などの建築物の特徴に、際立った地域差があったようには見えない。それでは、このような斉一性は、いったいどのようなプロセスによってもたらされたのであろうか。

人類文化遺産テクスト学研究センターでは、2015年11月25日に、国際的に著名なアメリカ及びドイツのパピルス学者を招聘し、国際ワークショップ「末期王朝・プトレマイオス朝エジプトにおけるテクストと社会」を開催しているが、2017年10月27日には、拠点形成事業のパートナーの一つであるベルリン自由大学の SFB980 からヨヘム・カール教授（エジプト学）とシュテファン・ハルトレップ研究員（エジプト学）、マインツ大学から北川千織研究員（エジプト動物考古学）を招聘し、国内からは中部大学の中野智章教授（エジプト学）と関西学院大学の藤井崇准教授（古代ローマ史）の参加を得て、国際ワークショップ「古代エジプト世界における宗教儀礼の斉一性と地域性」を開催した。

ワークショップでは、まず冒頭で主催者がギリシアの状況との比較、とりわけ後２世紀のパウサニアスによるメッセニアの叙述から看取される宗教儀礼の地域性をめぐる問題、そしてそれが提起する論点を開示し、次いでカール教授が中エジプトのアシュートにおける調査の成果を踏まえて、同地に葬られたジェファイ・ハピ１世に関する言及の通時的変遷を跡付け、そこから在地社会における有力者の神格化の過程を論じた。続いて、北川氏は、同じアシュートで調査されている「イヌの墓」から出土した膨大なイヌのミイラとその骨を分析の対象として、中エジプトにおける動物崇拝のあり方に新たな知見を提示した。これらの考古学的な研究とは対照的に、ピラミッド・テクストの文言が時代を通じて漸減していく現象に着目するハルトレップ氏は、そのような文言の変化と実際の葬祭儀礼の変化との関係について、興味深い事例を紹介しながら独自の見通しを提示した。さらに、中野教授は初期の王たちのセレクに見られる宮殿ファサードの意義、及びデザインの統一性について論じ、藤井准教授は、プトレマイオス朝エジプトと密接な関係にあったキプロスを対象として、ヘレニズム時代からローマ時代における皇帝崇拝の斉一性と地域性を明らかにした。

ベルリン自由大学が調査しているアシュートと名古屋大学が調査の一端を担っているアコリスは、同じ中エジプトに位置しており、これらの遺跡から得られた知見は、上エジプトと下エジプト（デルタ）との二項対立を前提とする伝統的な古代エジプト世界の理解に対して、大きな革新をもたらす可能性を秘めている。本センターでは、今後も同大学との連携を深めることにより、新たな古代エジプト世界像を構築する共同研究を進める予定である。

（周藤芳幸　人文学研究科教授）

2017年度活動報告●公開講演会・シンポジウム　科研費基盤(S)

花祭×いざなぎ流――神楽のなかの祭儀・呪術・神話

Hana-matsuri and Izanagi-ryū: Legends, magic and ritual in Kagura dances

2017年11月23日㈭　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール／24日㈮　名古屋大学文学部棟 大会議室

2017年11月23日・24日、名古屋大学にて、「花祭×いざなぎ流―神楽のなかの祭儀・呪術・神話―」が開催された。

本企画は、愛知県奥三河の民俗芸能である「花祭」と、高知県香美市槇山の民間信仰である「いざなぎ流」について、両者の信仰の有り様を、儀礼の「祭儀・呪術・神話」に注目して検討するものである。名古屋大学 CHT を中心に、いざなぎ流と物部川流域の文化を考える会、国際日本文化研究センター、花祭の未来を考える実行委員会、中部人類学談話会が共催となって企画・開催された。

23日には、公開講演会「花祭といざなぎ流への誘い」が催された。山﨑一司氏（民俗芸能学会評議員）、小松和彦氏（国際日本文化研究センター所長）、山本ひろ子氏（和光大学名誉教授）の三名によって、花祭といざなぎ流のそれぞれの成立史や信仰上の特徴、共通点と相違、両者を含めた日本の民間信仰の文化的様相について講演がなされた。

翌24日には、シンポジウム「中世神道と神楽」が催された。このシンポジウムは、花祭といざなぎ流に共通する信仰上の源流として研究史上問題にされてきた中世神道や中世神楽を軸に、それぞれの個別性と、両者を通底する信仰文化の特徴について検討するものであった。午前の部では、斎藤英喜氏（佛教大学歴史学部教授）によって、シンポジウムの問題提起がなされ、松山由布子、星優也氏（佛教大学大学院文学研究科博士後期課程）によって、花祭りの祭文や儀礼について研究報告がなされた。午後の部では、佐々木重洋氏（名古屋大学人文学研究科教授）と梅野光興氏（いざなぎ流と物部川流域の文化を考える会）によって、花祭といざなぎ流の「鎮め」の神事を比較する映像解説が

なされ、小川豊生氏（摂南大学外国語学部教授）と松尾恒一氏（国立歴史民俗博物館教授）によって、神楽や民間信仰の中世神道史との接点や、東アジアの宗教文化の中の位相について報告がなされた。その後の全体討論では、来場者も交えて、神楽や民間信仰の研究について、質問や意見交換がなされた。

花祭といざなぎ流は、神楽芸能や民間信仰の研究分野において、豊富な研究の蓄積がある。その両者に改めて焦点を当て、中世や神楽を軸に広く宗教文化を捉え直す本企画は、これまでにない画期的なものであった。両日ともに予想を超えた多くの来場者があったことからも、本テーマに対する関心の高さが窺われる。各講演や報告、全体討論の中では、広島県の比婆荒神神楽や東京都の青ヶ島の信仰など、花祭やいざなぎ流以外の神楽や地域信仰についても取り上げられた。それぞれの地域事例の解明と共に、これらを通暁する日本の宗教文化の様相を明らかにする必要性が浮き彫りとなった企画であった。

（松山由布子　日本学術振興会特別研究員）

花祭「一カ花」（月）

花祭「しずめ」

いざなぎ流「舞神楽」

いざなぎ流「鎮めの仮面」

2017年度活動報告●公開シンポジウム　　科研費基盤(S)

運慶と東国の宗教世界

The Religious World of Unkei and Eastern Japan

2018年2月18日㈰　横浜市立大学金沢八景キャンパス シーガルホール

神奈川県立金沢文庫において、2018年春に「運慶―鎌倉幕府と霊験伝説」展が開催された。本展覧会は、前年秋に東京国立博物館で開催された「運慶」展と連続しつつ、運慶造仏の意義を鎌倉幕府と霊験に焦点化して迫ろうとする、金沢文庫ならではの企画であった。本シンポジウムは、そこに集約された研究成果を広く学界のみならず市民と共有し、東国の宗教世界という視点を加えて、霊験仏師としての運慶を多面的に照らし出すべく企画されたものである。

その前提には、2017年にCHTの主催により名古屋大学で行われた説話文学会大会シンポジウム「神仏の儀礼と宗教空間を担うもの―唱導・仏像・仮面」の成果がある。報告者のひとり瀬谷貴之氏（金沢文庫主任学芸員）から、安居院澄憲の唱導文献である歴博本『転法輪鈔』に含まれる四篇の鎌倉幕府関係の仏事表白と運慶との関連が指摘された。この歴博本『転法輪鈔』は『国立歴史民俗博物館研究報告』188集（阿部泰郎・松尾恒一編、2017年）に収まる。展覧会にはその成果が大きく生かされたうえ、運慶に関する新出資料や新出作品、鎌倉永福寺発掘成果にもとづく新説など、近年の研究成果が導入されている。

これを受けて、シンポジウムは金沢文庫とCHTおよび東北大学文学研究科東洋・日本美術史研究会がともに主催し、美術史、国文学、考古学研究者の協働によるあらたな発見が提起される場となった。

当日は、湯山賢一文庫長による挨拶に始まり、基調講演では山本勉氏（清泉女子大学教授）「東国の運慶と京都・奈良」から、運慶造像の全体像を広く展望しながら東国造仏の特色が示され、阿部泰郎氏（CHTセンター長）「東国宗教世界の形成―運慶仏の地平」により、『吾妻鏡』に記す頼朝の信仰と作善記事から運慶の活動の意味を読み解く試みがなされた。続くパネルにおいて、牧野淳司氏（明治大学教授）「鎌倉幕府の寺院造営と唱導―願成就院・鶴岡八幡宮・永福寺」は安居院澄憲の唱導が東国における頼朝の仏法興隆事業に果たした役割を問い、長岡龍作氏（東北大学教授）「霊験仏をつくる―頰焼阿弥陀縁起をめぐって」は『頰焼阿弥陀縁起』絵巻の分析から運慶仏の霊験性を彫刻史に位置付け、福田誠氏（鎌倉市教育委員会市内遺跡調査研究員）「「地中に埋もれた歴史に光を」―永福寺の発掘と復元」は永福寺の宗教空間を復元し報告した。加えて、阿部美香は伊豆・走湯権現の金像を取りあげ、東国の宗教世界を問うにあたって神像を含む議論の必要性をコメントし、瀬谷氏の司会のもとで、6名全員による全体討議が行われた。

シンポジウムは一般の申し込みが250名の定員をはるかに超えて抽籤となり、市民社会の運慶をめぐる関心の高さがうかがわれた。最新の見解をめぐる議論は尽きず、満員の会場は大いに盛り上がりを見せた。

これら一連の共同研究の積み重ねの上に、金沢文庫にて、CHTとハーバード大学による国際ワークショップ「像内納入品研究の地平」（2018年6月）、及び「顕れる神々」展（2018年秋）が予定され、さらなる学術展開の期待が高まる。それらを支え推進くださる金沢文庫の皆様に、深く感謝申し上げる。

（阿部美香 CHT共同研究員）

聖なるテクストのマテリアリティ

The Materiality of the Sacred Text

2018年3月2日㊎　ドイツ・ハイデルベルク大学

2018年３月２日、ドイツ・ハイデルベルク大学日本学研究所（Institut für Japanologie）において、宗教文化遺産創成・国際研究拠点形成ワークショップ「聖なるテクストのマテリアリティ」が開催された。

日本にも西欧にも、連綿と続く歴史のなかで、仏教、キリスト教、あるいは民族宗教、それぞれの信仰のもとに人々が生み出した、かけがえのない文化・芸術の遺産がある。〈聖なるもの〉に物質性を介して近づこうとして造られたそれらは全て、目には見えない、あるいは、かつてこの世に生きた神仏への人間の希求の証である。このような〈聖なるもの〉と物質性との関わりという人文学のあらゆる領域における普遍的なテーマのもと、人類文化遺産テクスト学研究センターでは、2016年、2017年に、ハイデルベルク大学との連携により研究交流が行われており、今回は三度目の開催となる。

今回のワークショップでは、初めに、阿部泰郎教授による基調講演が行われ、中世日本の経典や絵巻が聖典として〈聖性〉を構築していった過程や要因について、その素材や技法、装飾、装丁、容器などのテクストの諸水準や各位相、伝来のなかでの改変も含めて報告された。続いて、CHTの木俣元一教授により、シャルトル大聖堂のステンドグラスに基づきながら、聖レオビヌスの生涯とその奇跡を視覚化した説話的イメージが、祭儀との関わりにおいて典礼空間を形成していく事例が紹介された。さらに、名古屋大学のディラン・ミギー氏（「旧大惣本の合巻」）、伊藤信博氏、

近本謙介氏、慶應大学の石川透氏（「奈良絵本・絵巻のかたち」）、高橋悠介氏（「中世密教聖教の表紙をめぐって」）、ルール大学ボーフムのアンナ・アンドレーワ氏（「中世日本におけるお産と判断の技術」）、ハンブルク大学のベレニス・メラー氏（「形見としての『すみた川のさうし』」）など、参加した研究者の研究領域から、多様な宗教／俗世の実践とテクスト及びそれに付随する造形物に関する報告が行われ、総括のディスカッションでは、テクストとして現象したヨーロッパと日本における〈聖性〉の諸相が比較検討された。ハイデルベルク大学のユーディット・アロカイ教授の問題提起を契機として行われた意見交換を通じて、研究対象をマテリアリティとの関わり方に照らすことで、宗教学、文学、美術史学といった各分野の垣根を越えられる可能性が示唆されたことは、今回のワークショップの成果であろう。

３月５日には、ハイデルベルク市内にある民族学博物館（Völkerkundemuseum）を訪れた。絵巻をはじめとする同館の日本美術のコレクションを調査することができ、大変有益な時間となった。

洋の東西を問わない普遍的テーマについて、様々な領域から数多くの事例を収集し、他分野の研究者と意見を交わす場を設けること、そして、その定期的な開催が人文学の研究には欠かせないということを、この一連の研究会に継続して参加させていただき、心から実感している。

（百合草真理子　人文学研究科特任助教）

※特に記載のないものは、CHT主催

2017年度研究活動／Activity Report for the Year 2017

公開シンポジウム／Open Symposiums

前衛芸術と古典主義—1880年〜1945年（後援：日仏美術学会）

Classicism and Avant-garde: 1880–1945

▶科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業

デイヴィッド・コッティントン［キングストン大学］

「バック・トゥー・ザ・フューチャー？ 前衛, 古典と〈後衛〉の概念」（英語発表）

河本真理［日本女子大学］「前衛／古典主義の相克—両大戦間期の美術をめぐって」

久保昭博［関西学院大学］「古典主義への回帰はモデルニテのパラドックスか？」

【セッションⅠ】古典主義と第一次世界大戦

松井裕美［名古屋大学］「《切らずに広げて》(“Ne coupez pas, dépliez”)—キュビスムの歴史と第一次世界大戦」

池野絢子［京都造形芸術大学］「カルロ・カッラ—プリミティヴィスムと古典主義のあいだ」

【セッションⅡ】大戦間期の古典主義

飛嶋隆信［東京農工大学］「両大戦間フランス美術における危機と伝統」

木水千里［お茶の水女子大学］「シュルレアリスムと古典主義」

利根川由奈［早稲田大学非常勤講師］「反–肖像画—ルネ・マグリットによる過去と現在の表象」

2017年9月23日土・24日日　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

花祭×いざなぎ流—神楽のなかの祭儀・呪術・神話

P.9参照

Hana-matsuri and Izanagi-ryū: Legends, magic and ritual in Kagura dances

【公開講演会】「花祭といざなぎ流への誘い」

山﨑一司［民俗芸能学会評議員］「大神楽と花祭—「生れ清まり・浄土入り」から「神遊び」へ」

小松和彦［国際日本文化研究センター］「いざなぎ流の祭儀—呪詛・神楽・鎮め」

山本ひろ子［和光大学名誉教授］「呪術と神楽—いざなぎ流と青ヶ島の神楽」

2017年11月23日木13:00–17:00　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

【シンポジウム】「中世神道と神楽」

斎藤英喜［佛教大学歴史学部］「『中世神道と神楽』にむけた問題提起」

松山由布子［名古屋大学］「奥三河における祭文の展開」

星 優也［佛教大学大学院］「天の祭り論—奥三河花祭の〈秘儀〉をめぐって」

佐々木重洋［名古屋大学］／梅野光興［いざなぎ流と物部川流域の文化を考える会］

「「花祭の鎮め」と「いざなぎ流の鎮め」」映像上映＋解説

松尾恒一［国立歴史民俗博物館］「祈る神と鎮める神—東アジアの宗教と民俗神」

小川豊生［摂南大学］「修験的想像力と神楽の世界—中世神道研究との接点を求めて」

2017年11月24日金10:00–17:00　名古屋大学文学部棟 大会議室

近世・近代の古代美術受容と歴史観の形成

The Reception of Classical Art and the Formation of the Conception of History in the Early Modern and Modern Period

▶科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業

百合草真理子［名古屋大学］「ルネサンスにおける古代の受容とキリスト教美術」

栗田秀法［名古屋大学］「フランスにおける美術史の始まりと古代美術」

三浦 篤［東京大学］「19世紀フランスにおける古代美術の受容」

松井裕美［名古屋大学］「20世紀前半のフランス前衛美術における古代彫刻受容」

2017年11月25日土13:30–17:00　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

運慶と東国の宗教世界（主催：神奈川県立金沢文庫）

P.10参照

The Religious World of Unkei and Eastern Japan

2018年2月18日(日)10:30–16:00　横浜市立大学金沢八景キャンパス シーガルホール

公開セミナー／Open Seminars

Nanzan Seminar for the Study of Religion and Culture 1

▶Core-to-Core Program

Hannah Gould［メルボルン大学／金沢大学］
「捨てられるモノにみる宗教の物質性—現代日本における仏壇の事例研究」

Rebecca Mendelson［デューク大学／駒澤大学］「国家のための内観—勝蜂大徹とその在家禅」

Esben Peterson［ゲーテ大学フランクフルト・アム・マイン／南山大学］
「ドイツ語雑誌における日本の宗教の位置」

Dana Mirsalis［ハーバード大学／國學院大学］「女子神職は本当に普通の女性として生きられるのか—ジェンダー、関係性と女子神職」

Lindsey E. DeWitt［九州大学］「大峰山と沖ノ島での世界遺産と女人禁制について」

Julia Cross［ハーバード大学／名古屋大学］「12世紀から14世紀における舎利信仰の共同体」

2018年1月7日(日)・8日(月)9:30–17:30　南山大学宗教文化研究所 セミナー室

宗教文化遺産セミナー

ラポー・ガエタン［名古屋大学］「真言密教のモダニティ—高野山の高僧水原堯榮の「立川流」」

2018年1月9日(火)18:00–19:00　名古屋大学ユニバーサルクラブ

国際ワークショップ／International Workshop

古代エジプト世界における宗教儀礼の斉一性と地域性

P.8参照

Uniformity and Diversity in Ancient Egyptian Religious Practice

▶Core-to-Core Program

周藤芳幸［名古屋大学］「論点の提示」

J・カール［ベルリン自由大学］「古代エジプトにおける神格化—ジェファイ：ハピ１世の場合」

北川千織［ヨハネス・グーテンベルク大学］
「古代アシュートにおけるイヌの生活—アシュートの「イヌの墓」からのミイラと遺存体をめぐって」

S・ハルトレップ［ベルリン自由大学］
「ピラミッド・テクストの唯一の表記は儀礼の修正の証拠となるのか」

中野智章［中部大学］「彼らの名前を書く—最初のファラオたちのセレクに見る統一性と地域性」

藤井 崇［関西学院大学］「ヘレニズム期・帝政期キプロスの支配者崇拝における中心と周縁」

2017年10月27日(金)10:00–15:30　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

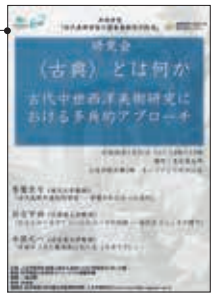
聖なるテクストのマテリアリティ　The Materiality of the Sacred Text

P.11参照

2018年2月2日(金)　ドイツ・ハイデルベルク大学

研究会／Research Group

《古典》とは何か—古代中世西洋美術研究におけるアプローチ



What does “Classics” Mean?: New Approaches in the Art History of Antiquity and Medieval Europe

▶科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業

芳賀京子［東北大学］「古代美術の選択的受容—受容されなかった古代」

谷古宇尚［北海道大学］「ピエトロ・カヴァリーニとローマの伝統—古代とゴシックの間で」

木俣元一［名古屋大学］「中世キリスト教美術における〈スポリア〉」

2018年1月27日(土)14:00–17:00　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

2018年度研究活動

国際シンポジウム／International Symposium

灌頂の世界—仏教文化圏における通過儀礼の思想と実践 P.6参照

The World of Abhiseka: Consecration Rituals in the Buddhist Cultural Sphere

▶Core-to-Core Program

2018年5月7日㊊・8日㊋　カリフォルニア大学サンタバーバラ校

日本仏教と論義 Disputations and Japanese Buddhism P.5参照

▶Core-to-Core Program

ジャン=ノエル・ロベール［コレージュ・ド・フランス］「宗教思想の原型としての論義」基調講演

楠　淳證［龍谷大学］「法相論義と仏道—仏性義の展開と一闡提の会通」

蓑輪顕量［東京大学大学院］「『法勝寺御八講問答記』に見る戒律論義」

苫米地誠一［元・大正大学］「論義の歴史と真言宗」

2018年5月13日㊐10:30–16:45　龍谷大学大宮キャンパス 東黌3階302講義室

黄檗文化の越境と発展—人と文物の交流

The Diffusion of Ōbaku Zen Culture: Exchanges of Goods and Persons

田中智誠［萬福寺文華殿主管・黄檗文化研究所］「『黄檗清規』の出版と近世日本の宗門改革」基調講演

錦織亮介［福岡美術館］「長崎に来舶した中国画人と黄檗派」

若木太一［長崎大学名誉教授］「隠元禅師の詩想—「萬国の春」」

廖肇亨［中央研究院中国文哲研究所］「忘れられる詩僧—黄檗宗及び近世日本の僧詩」

松岡智訓［岩国微古館］「岩国領と独立の交流」

田世民［台湾大学］「近世日本における中国式儀礼—黄檗禅師と朱舜水を例に」

徐興慶［中国文化大学］「朱舜水、鄭成功、独立性易と黄檗僧の人たち」

【討論】「黄檗宗と日中文化交流」

2018年7月6日㊎9:20–19:00　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

国際ワークショップ／International Workshop

日本宗教研究の最前線 The Frontline of Studies on Japanese Religions P.7参照

▶Core-to-Core Program

郭佳寧［名古屋大学］「大伝法院創建から見る覚鑁と鳥羽院」

Jonathan Thumas［Harvard University］「アーカイヴとしての経塚—歴史考古学からみた院政期の別所」

Jesse LeFebvre［Harvard University］「非歴史的物語としてのリアルポリティーク—伴大納言絵詞に関する一考察」

金陀美［名古屋大学］「明恵の釈迦信仰—『十無尽院舎利講式』を中心に」

Eric Swanson［Harvard University］「「聖なる天蓋」の修繕と雅楽の力—『七天狗絵』東寺巻の再考察を中心に」

Julia Cross［Harvard University］「湯殿山の即身仏—イデオロギー、共同体、政治」

三好俊徳［名古屋大学］「真福寺聖教の書写・伝来と大須文庫の形成」

2018年6月21日㊌13:30–17:30・22日㊎9:30–15:30　名古屋大学文学部棟 大会議室

像内納入品研究の地平 The New Horizons of Research on Objects Inserted in Statues P.7参照

▶Core-to-Core Program

奥　健夫［文化庁文化財部美術学芸課］・長岡龍作［東北大学］「像内納入品研究の諸問題」　コメンテーター　秋山　聰［東京大学］

James Robson［Havard University］「Filled With Meaning: Statues and Their Contents in East Asia」

Youn-mi Kim［Ewha Womans University］「Body inside Body: Donor Clothing Enshrined in Korean Buddhist Statues」

Suenghye Lee［Curator of Buddhist Art, Leeum, Samsung Museum of Art Seoul］「Pokchang: The Consecration Deposits of Korean Buddhist Images」

2018年6月23日㊏15:30–17:15・24日㊐9:20–12:00　神奈川県立金沢文庫

公開セミナー／Open Seminars

奥会津“書物の郷”の形成—天正期真言僧祐俊の聖教典籍書

The Formation of a “Village of Books” in Oku-Aizu:
The Tenshō Period Shingon Monk Yūshun and his Collections of Sacred Texts

講師 久野俊彦［東洋大学非常勤講師］

2018年4月24日㈰15:00–18:00　名古屋大学文学部棟 大会議室

見えないものを「見る」—イメージとマテリアリティ　Seeing the Invisible: Images and Materiality

中村夏葉［愛知県立芸術大学］「絵画としての曼荼羅の機能と役割—現図曼荼羅における図像解釈研究の可能性」

木俣元一［名古屋大学］「『三位一体』をいかに可視化するか—西洋中世における図像化の試み」

百合草真理子［名古屋大学］「ルネサンス芸術家による聖なるものの表象」

2018年6月24日㈰14:00–17:00　名古屋大学文学部棟 131講義室

講演会／Conferences

国際日本研究の現状と大学院生の養成

The Actual State of International Japanese Studies and the Formation of Graduate Students

▶Core-to-Core Program

講師 ハルオ　シラネ［コロンビア大学］

2018年5月31日㈭14:00–16:30　名古屋大学文学部棟 130会議室

公開シンポジウム／Open Symposiums

中世禅への新視角—『中世禅籍叢刊』が開く世界

New Visions in the Study of Medieval Zen: The World Opened by the “Chūsei Zenseki sōkan” Collection

【趣旨説明】末木文美士　【総括コメント】阿部泰郎

パネル１「能忍・栄西とその周辺」古瀬珠水、和田有希子、米田真理子

パネル２「聖一派の展開と癡兀大慧」加藤みち子、亀山隆彦、菊地大樹

パネル３「中国仏教の受容と日本禅」高柳さつき、柳 幹康、高橋秀栄、石井修道

パネル４「中世仏教の広がり」常磐井慈裕、原田正俊、三好俊徳、伊藤 聡

2018年7月7日㈯10:00–17:50　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

西洋美術史における〈古典〉と〈古典主義〉

P.4参照

Classics and Classicism in Western Art History

▶科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業

芳賀京子［東京大学］「古代ギリシア・ローマ美術における〈古典〉」

川本悠紀子［名古屋大学］「古代ローマ建築に見られる『ヘレニズム化』」

奈良澤由美［城西大学］「初期中世美術における『古代』、『古典』、『擬古』」

木俣元一［名古屋大学］「ゴシックにおける古典主義とモダニズム」

谷古宇尚［北海道大学］「ナポリ・アンジュー家の美術と古代」

伊藤拓真［神戸女学院大学］「古典の形成—チッタ・ディ・カステッロ時代のラファエロ」

百合草真理子［名古屋大学］「16世紀初頭の北イタリアにおけるカトリック改革の動向と古典主義」

秋山 聰［東京大学］「アルプス以北における『古代』の再生と『古典』」

栗田秀法［名古屋大学］「王立絵画彫刻アカデミーと古代彫刻」

佐藤直樹［東京芸術大学］「ヴィンケルマンの古代受容とドイツ古典主義の形成」

松井裕美［名古屋大学］「20世紀の古代美術受容と古典主義の複層性」

【全体討論】小佐野重利［東京大学］

2018年7月14日㈯・15日㈰　名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

通年の基盤的調査と研究連携

「真福寺大須文庫調査研究会」の活動支援

重要文化財一括指定のための悉皆調査・データ入力・デジタル画像化の実施
『中世禅籍叢刊』編集・公刊のための調査・研究

「勧修寺聖教文書調査団」の活動支援

重要文化財一括指定のための聖教目録作成

人間文化研究機構との共同研究

「列島の祈り―日本・儀礼テクストの世界」展示企画立案と共同研究（2015〜18）

「花祭アーカイヴス」構築の活動支援

奥三河花祭資料伝承者・所蔵機関への現地調査・デジタル画像化

刊行本の紹介

定期刊行物

HERITEX vol.2
2017年９月

人類文化遺産テクスト学研究センター（CHT）は、人類にとってかけがえのない文化の遺産すべてをテクストとしてとらえ、アーカイブス・物質文化・視角文化の3つの視角を軸に、創造や意義をテクストとして読み解く統合テクスト学の知見より、人文学研究の新たなステージを目指す研究機関である。本誌はCHTが主体となった研究活動の成果や、関連・連携する諸機関や研究者の人類文化遺産をめぐるさまざまな調査や発見についての速報を、広く紹介するものである。

学術研究資料集

中世禅籍叢刊［完結］
中世禅籍叢刊編集委員会（阿部泰郎ほか）編
臨川書店

第7巻　禅教交渉論
2016年10月　総712ページ

第10巻　稀覯禅籍集
2017年８月　総704ページ

第11巻　聖一派 続
2017年１月　総672ページ

第12巻　稀覯禅籍集 続
2018年３月　総720ページ

『中世禅籍叢刊』は、真福寺と金沢文庫を中心とした日本の寺院・文庫に所蔵されている貴重な禅に関する書物の本文を影印・翻刻により示し、それに解題を付して紹介する叢書である。CHTの全面的な協力のもとで、2013年から臨川書店より刊行が続けられてきたが、2018年3月に『稀覯禅籍集 続』が出版されたことで全十二巻が完結した。いずれも日本における禅宗の思想やその位置づけについて再考を促す書物が紹介されており、禅宗史さらには日本仏教史の研究には必携である。

一般書籍・図録等

中世日本の世界像
阿部泰郎著
名古屋大学出版会　2018年２月　594ページ

中世の日本が生みだし共有した日本国の世界イメージを、系図語りから縁起絵巻まで、宗教史、歴史学、文学、美術史、芸能史等の成果を横断的に見渡しながら、音声や身体、文字と図像のテクストなど諸水準の複合の動態として、その創造を担う主体に注目しながら普遍的意義を問う、著者の30年間の探究の成果を統合し体系化した著作。
（科研費研究成果刊行助成出版）

中世王権の音楽と歴史
猪瀬千尋著
笠間書院　2018年３月　452ページ

音楽はいかなる権力性・政治性を有していたのか。遊芸ではなく有職故実に裏打ちされた高度な政治の一環として音楽を捉えなおし、果たした役割を明らかにする。文学・歴史・芸能・美術史・建築史ほか、あらゆる視点から文献を読み解き、宮廷儀礼における音楽の実態を考察する。また唱導文献の読解を通して、王権を支えた音楽の宗教性の解明にも及ぶ。総合史としての中世音楽の全体像を示した意欲作。
中村元東方学術奨励賞受賞。

CHT
Research Center for Cultural Heritage and Texts

名古屋大学人文学研究科附属 人類文化遺産テクスト学研究センター ニューズレター No.4

発行日　2018年８月31日
発　行　名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町　TEL/FAX: 052-789-3509
http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/cht/　E-mail: cht@lit.nagoya-u.ac.jp

科研費 KAKENHI
JSPS（26220401）